

はじめに、極く簡単に
要点を示します。

最初の「キンベル」との出会い



消えゆく左官職人の技
鏝絵

写真・文 藤田洋三
小学館(1996)

最初の「キンベル」との出会い



↑土蔵の正面戸前にあるやや太めの「麒麟(きりん)」。青色の顔料は、キング・オブ・ブルーが訛って職人達の間で「キンベル」と呼ばれた。

～ 熱帯睡蓮 **King of blue** の、
あの色を、ラピスラズリに混ぜたに
違いない。



↑土蔵の正面戸前にあるやや太めの「麒麟(きりん)」。青色の顔料は、キング・オブ・ブルーが訛って職人達の間

何と、・・・

新編』¹⁰⁹⁾ のベレ

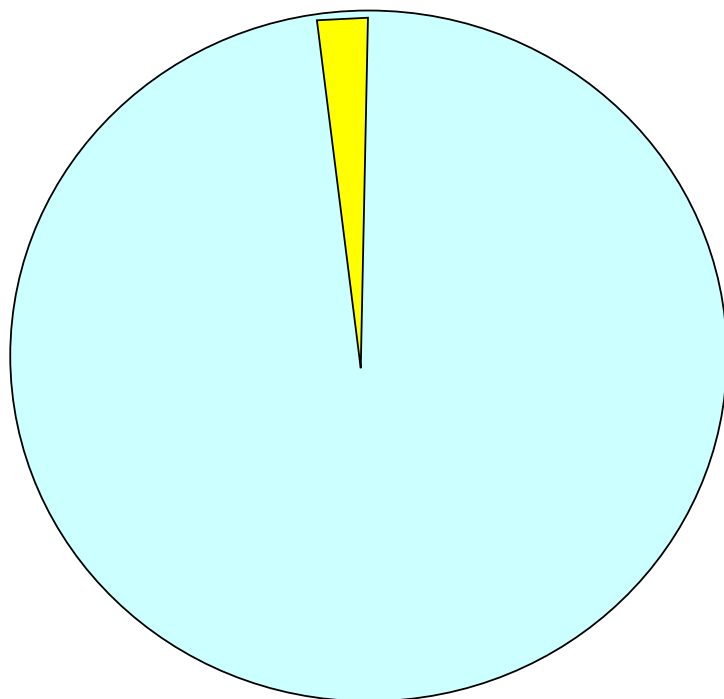
昭和 12 年 (1937)

であった。明治 15 年出版の『絵具染料薬品略説』¹¹⁰⁾ では「ベル」と表示され、大正 8 年出版『工業薬品大辞典』¹¹¹⁾ では「ベレンス」と表示されている。

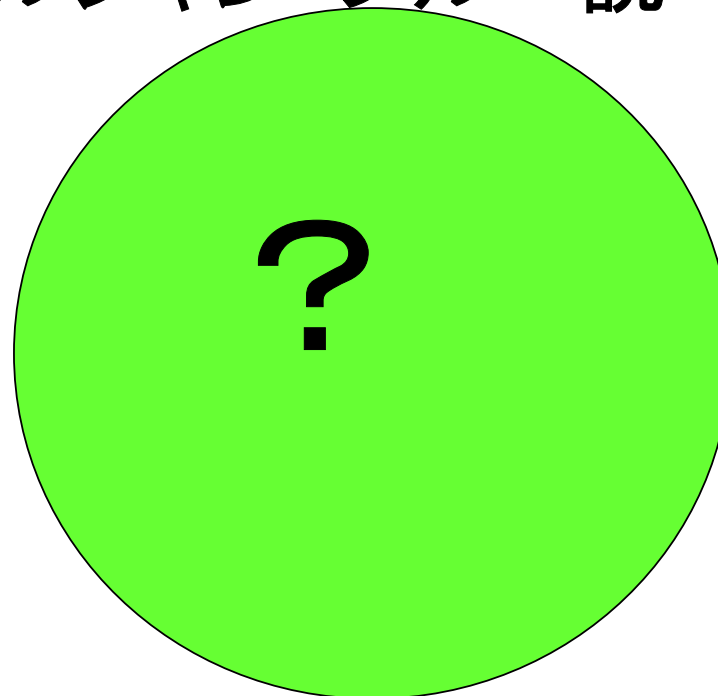
長崎へ来航の船員たちの脇荷としてプルシャンブルーが持ち込まれ、長崎で紺青と訳された¹¹²⁾ が文化 4 年 (1807) の記録が最も古く、それ以前は未詳である。江戸時代の大坂の絵具屋の呼称¹¹³⁾ としては「ベレンス」「ベル (金ベル, 濃ベル, 蘭口ベル)」であった。そして明治, 大正, 昭和になっても未だ「ベル」がその呼称として残っていた。

形勢逆転か

ラピスラズリ説
(ウルトラマリン・ブルー)



プルシャン・ブルー説





プルシャンブルーの日本史

2021年02月18日

春日

1. キンベルと要点
 2. 伊藤若冲のプルシアンブルー
 3. 北斎、広重のプルシアンブルー
 4. プルシアンブルーの歴史・日本編
 5. 鋳絵の青の輝きは、
構造色か蛍石か
 6. その他の青
- } 作成中、未完

1. キンベルと要点

鰻絵の鳳凰について、ラピスラズリ説が圧倒的優勢のなかで、
敢えて「プルシアンブルー」という異なる色を持ちだすのは
苦しいものがありますが、新たなストーリーです。

プルシアンブルーとはなにか、というのが、説明の中心で、
ガイドで使うことは難しいと思いますが、浮世絵の話は、
海外からのゲストにも、興味をもってもらえるかと思っています。

以前にもお話した、写真家の藤田洋三氏が、鰻絵に関する著書の中で述べている言葉の、『サフラン酒の蔵の建設工事をしていた当時の職人の会話の「キンベル」』という話は軽視できません。

そこで、春日の珍説として、『鮮やかでかつ堅牢な青色を維持したいため、ベースはラピスラズリを混ぜた漆喰、その上に、構造色で輝く熱帯睡蓮のキングオブブルーを調合した』と考え、鰻絵の青のベースにラピスラズリ、そしてプラスアルファに熱帯睡蓮の染料、という方法を想像していました。

ところが、最近、別の情報として、江戸時代に輸入品のプルシャン・ブルーを

「金ベル」と呼んだという記述を知り、鋳絵の青のベースは、プルシャン・ブルーなのかも知れない、と考えるようになりました。

でも付加的に構造色などプラスアルファの効果を使ったという見方を捨て去ることはできず、発光色として蛍石を混合する策もあるな、とかいろいろ考えています。そこで、今回は、ラビスラズリ(ウルトラマリン・ブルー)説、プルシャン・ブルー説を両論併記でまとめました。

要は、鰻絵蔵の工事現場で聞こえた「金ベル」という言葉の解釈でして、

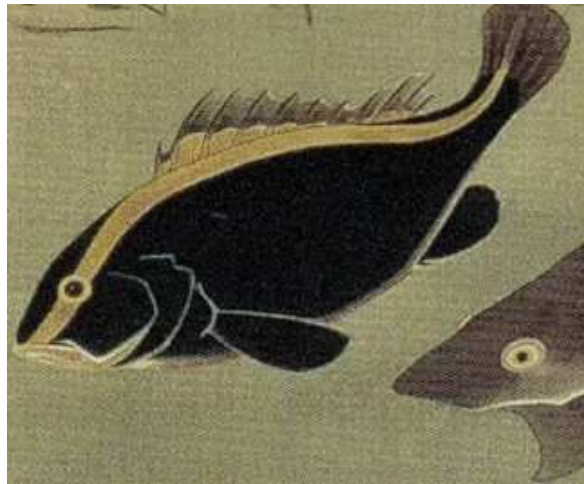
(A) キングオブブルーの通称呼称なのか、
(B) プルシャン・ブルーの業界用語なのか、
ということなのです。

そして、前者の (A)説には、ラビスラズリという
人気が後押しがある、ということ。

2. 伊藤若冲のプルシアンブルー

伊藤若冲『動植綵絵』群魚図・「鯛」

(1757-1766)



黒ずんだ濃紺色で描かれているルリハタがプルシアンブルーと判定されている。
日本最初のプルシアンブルーである。



若冲は、その画業の初期に、中国の「宋元画」を学び、**1千点**を模写したと伝えられています。伊藤若冲の本当の革新性は、宋元画の文正、更に狩野探幽の細密画を越えた、脅威的なテクニック、そして独自の描画法にあると云われています。

それにしても、この製作を始める4年前に国内初搬入の顔料が、全30幅の測定913ポイントのうち只一箇所で見つかったのです。最新の顔料への挑戦だったのでしょうが、どんな実験をして、決断したのか、知りたいです。

3. 北斎、広重のプルシアンブルー

「凱風快晴」、
「神奈川沖浪裏」
(1831-33年)



北斎ブルー

北斎ブルー 「諸国瀧廻り」 (1833年)



1.和州吉野若尾馬洗の瀧

わしゅうよしのおしつねうまあらいのたき
大和（現奈良県）吉野



2.東都葵ヶ岡の瀧

とうとあおいがおかのたき
現在の徳ノ門近辺



3.相州大山うづべんの瀧

そうしゅうおおやまろうべんのたき
相模川県大山にある自然の瀧



4.美濃国養老の瀧

みのくにきやうろうのたき
美濃（現岐阜県）養老の瀧



5.上野国磐山きりふりの瀧

じやつけくるがみやまりふるのたき
上野（現栃木県）の磐体山（別名黒髪山）谷間の瀧



6.木曾海舟小野ノ瀑布

きでかいづうおののぼくふ
長野県上松町小野にある瀧



7.木曾路ノ里岡沢の瀧

きでじのむくあみだのたき
岐阜県郡上市にある瀧



8.東海国坂ノ下清瀧くわん石

くわんいせ
三軒巻谷郡坂ノ下にある坂の下清瀧の瀧

歌川広重

「東海道五拾三次之内」
(1831-33年)



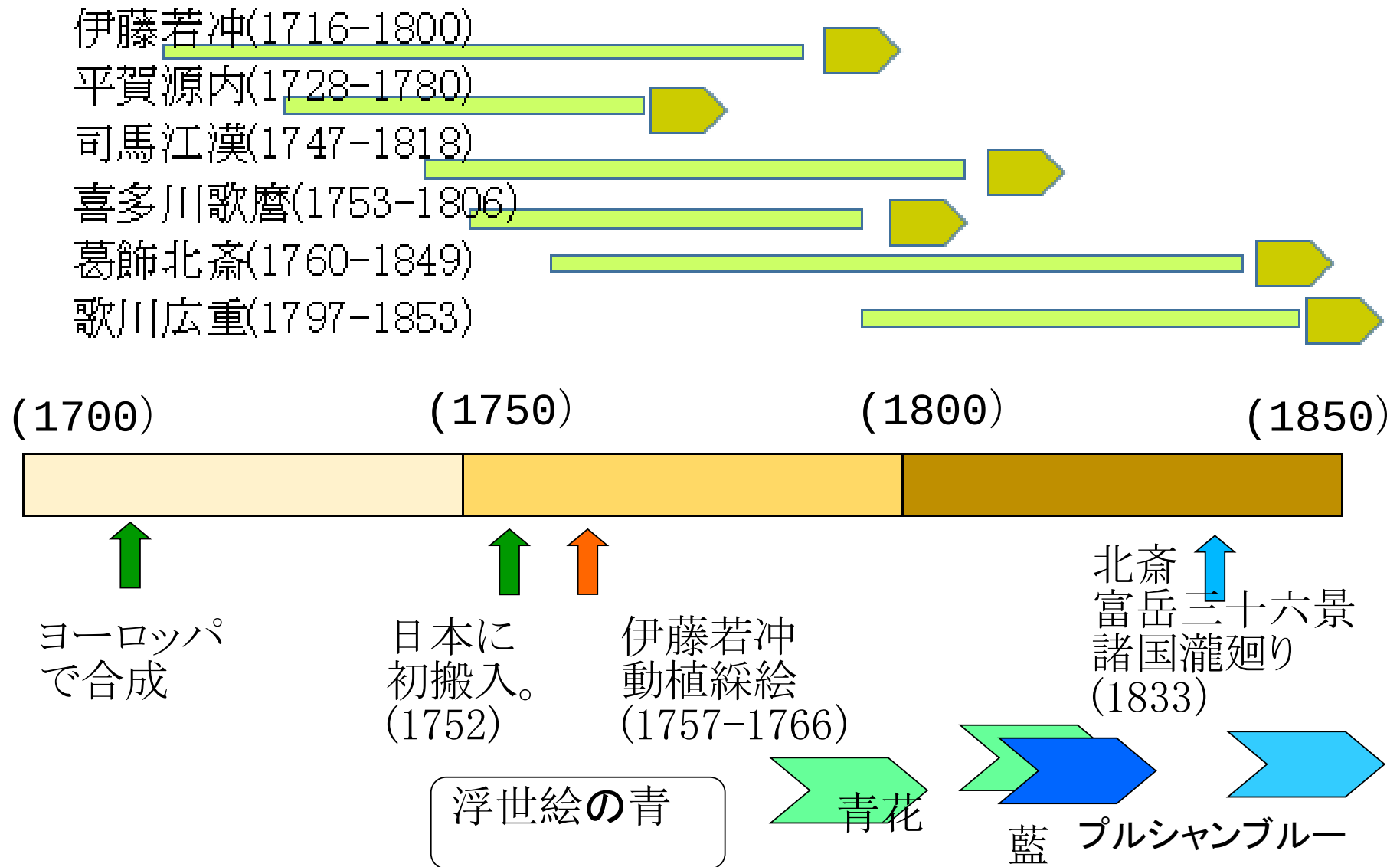
少し前の時代、17世紀のブルー（1701年以前）

尾形光琳の燕子花図の花弁は、群青、紺青と緑青。



群青、紺青は、ともにアズライト(藍銅鉱)からの粉末の細かさによる。
江戸期後期以降、良質の紺青は日本では手に入らなくなったという。

4. プルシャンプルールの歴史・日本編



若冲の動植綵絵の青のいろは、
群青
藍
そして、プルシアンブルー

浮世絵にプルシアンブルー が多用され始めたのは、まさに、北斎、広重の活躍する1830年代。

極く一部に、フルシユンブルーを使用。
おそらく日本で一番最初。
次に平賀源内が使用、とされています。

1800年までは青花(ツユクサ)の青、
1830年まではそれに加えて藍の青でした。
そして突如、プルシアンブルーの青が
加わったのです。

これが、浮世絵版画の色彩の豊かさ、
美しさに決定的影響を与えました。
ヨーロッパで印象派の画家が使い始めたのは、
この40年後です。本当に驚きです。

ゴッホもこの色を好みました。
アルル時代の傑作である「星
降る夜」(1888。オルセー美術
館)にも、コバルトブルーもウル
トラマリンとともに、プルシアン・
ブルーが使われていることが
確認されています。



弟テオへの手紙の中で、「日本の巨匠から大きな影響
を受けた」と明言していることが、よく知られています。

青のグラデーションを生かした浮世絵の隆盛は、さまに新たな顔料、プルシアンブルーとの出会いであったと云えます。

鎖国の時代でも、貴重品でしたでしょうに、ちゃんと手に入れていたというのは、南蛮通詞、貿易商、版元、版画家、誰の手腕・目利きだったのでしょうか。

そして、刷り師の腕もあったとのことでした。

以上のように、最近、江戸時代に輸入品のプルシャン・ブルーを「金ベル」と呼び、明治から昭和にかけても、この云い方は残ったということを知りまして、(*1)
鎧絵の青のベースも、もしかしたら、プルシャン・ブルーなのかも知れない、と考えるようになった次第です。

(*1) 鶴田榮一、“絵画講座第Ⅱ講 顔料の歴史”、色材、vol75、2002)

『色材』は、国内唯一の色材に関する学術団体、色材協会の発行する学術誌です。

前述のように、プルシャンブルーが、ヨーロッパ絵画で使われ始めたのは印象派以降のようです。印象派の画家が好んで使った色であったが、プルシアン・ブルーは次第に使われなくなり、あとで開発されたコバルト・ブルーなどの合成青色顔料にとって代わられました。考えられる理由は、混色に強いプルシャンブルーを扱う難しさにあったといえます。

現在も、油絵具12色セットの青は、ウルトラマリンとコバルトブルーという絵具チューブが多いです。

現在、日本画、油絵、ともに使いやすいと人気の青は、フタロシアニンブルーです。

色合いに優れ鮮明で、耐光性が高く(褪色が少なく)、堅牢な(耐久性にすぐれる)ことから、好まれています。

20世紀前半に、合成化学で生まれた新色です。

5. 鰻絵の青の輝きは、構造色か蛍石か（未完）

既に「熱帯睡蓮」のキングオブブルーは、確かに美しく、鰻絵の鳳凰の輝きに似ています。染料とはいえ、レーキ化する方法もあり、使用に壁はありません。



「熱帯睡蓮」の構造色効果にこだわる必要はなくなりましたが、候補には違いないと思います。

もうひとつの候補は、蛍石の利用です。

フレスコ画に蛍石を使っておられる日本画家も、おられます。

イギリス産蛍石ですと、太陽光でも輝くそうで、もしサフラン酒の鰻絵に使ったとしても、不思議ではありません。

いずれにせよ、特別な蛍石でしょう。

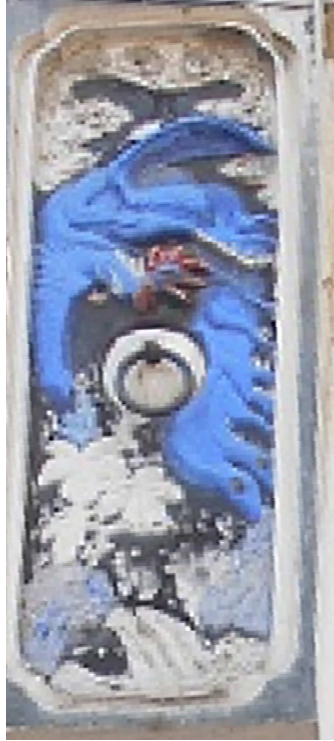
「熱帯睡蓮」のような植物性の構造色の身近な例



孔雀サボテン

「構造色ではないですが、染料から作られた赤の色は、たくさんありまして、油絵具でポピュラーなものに、クリムソン・レーキ、カーマイン・マダーがあります。

藍玉も、**2～10%**の不溶性のインジゴが含まれ、レーキ化のひとつと云えます。
藍の染色とは、藍玉に石灰などをえて発酵させて水溶性のインドキシル（これが藍汁）にし、布を漬けて空気にさらすと酸化されて再度インジゴになり、染色されるという仕掛けです。



鳳凰の色の全部を、キングオブブルーをレーキ化したものを使ったという考えもありえるのかなと、と思いますが、皆さんに愛されているラピスラズリが全く使われていないという、悲しいことになってしまいます・・・。

余りに大胆な、ものすごい仮説ですが、でも、孔雀サボテンの、あの豪華な色を考えますと、植物性染料のみという可能性も、ゼロではないと思っています。

(微細構造を破壊しないという技術的障壁はありますが。)

6. その他の青（未完）

(1) 景德鎮磁器とコバルト・ブルー

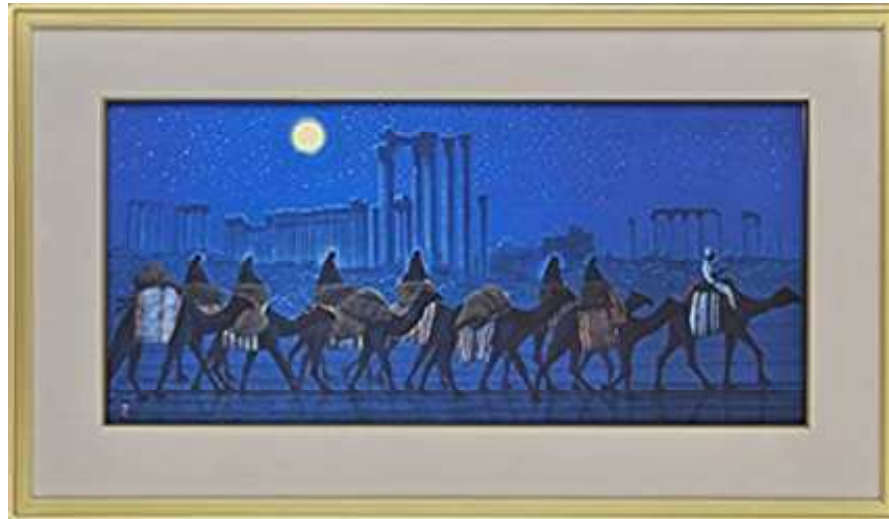
元代末期、シルクロードを經由してイスラムからもたらされた天然コバルト・回青(ホイチン)によって、景德鎮磁器と染付の技術が出会い、「青花(チンホア)」(染付)として完成しました。

英語では Blue and White と呼ばれているそうですが、真偽は確認できませんでした。

(2) 平山郁夫画伯の青

(3) 東山魁夷画伯の青、奥田元宋画伯の赤

平山郁夫画伯の青



パルミラ遺跡を行く・夜(2006)

同・朝

(平山郁夫シルクロード美術館蔵)

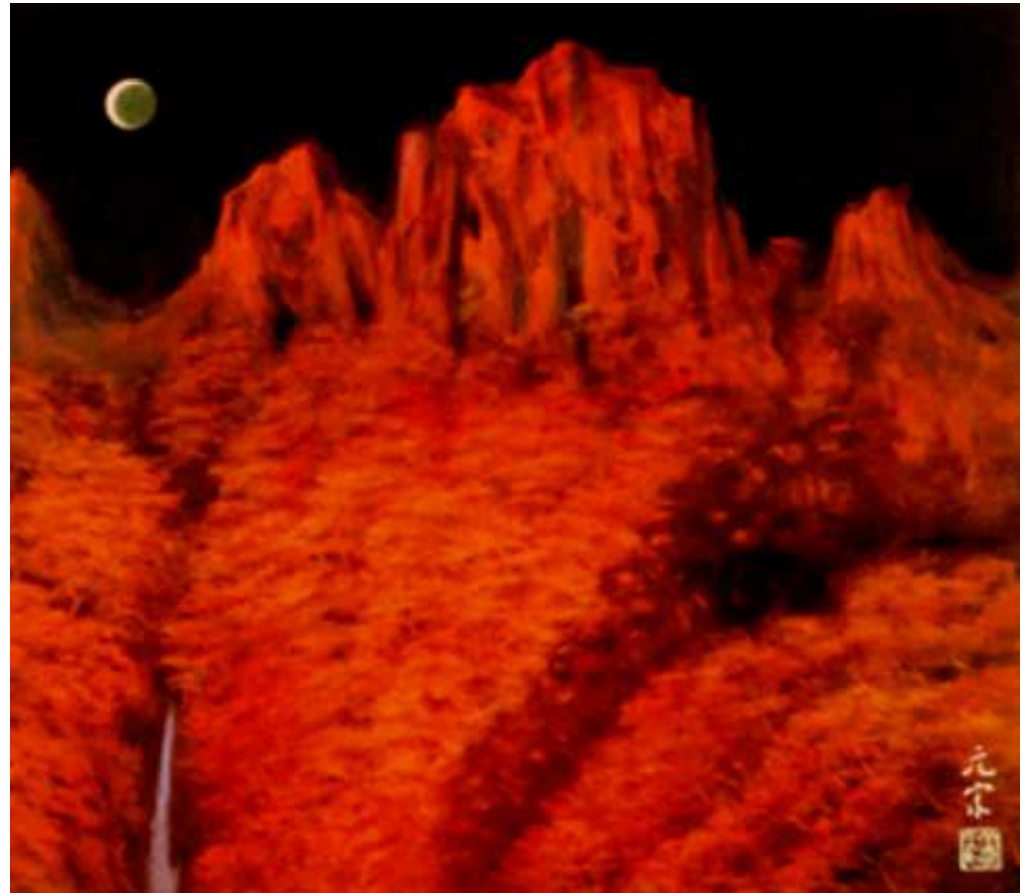
余談ですが、絵の背景にパルミラ宮殿の遺跡が描かれています。
この宮殿のある中心地から離れた郊外にある地下墓の、入り口を飾る魔除けが、
鬼瓦のルーツの一つとされています。

奥田元宋画伯の赤

奥田元宋画伯の赤は、
赤色の最高到達点の
ひとつだと思います。

自然の紅葉に染まる山の
色を越え、個人的には、
錦鯉の金昭和の「赤」にしか
見られない色と思っています。

青の話なのに、何で「赤」と
思っておられる人もいると
思います。
それは、・・・。



赤峰秋映

サフラン酒の青い鳳凰は、本来の四霊獣である「北の守護神」なら、朱雀、つまり赤なのです。そこに、四瑞獣、或いは最上位の鳳凰を、持ってきたのです。朱雀は、英語では、Virmilion Bird です。

もし、画伯が青をテーマに連作されたら、どんな色になるだろう、きっと今まで見たことのない青に違いなく、サフラン酒の鳳凰の青に似ているといいな、と想像していますが、一方、本来の朱雀、その名称にあるVirmilion の色を、元宋さんに決定して下さいと依頼したら、どんな色になさったか、こんな想像も、楽しくなります。

鰻絵の絵柄の解釈、申の不在存在、鰻絵の色材、
更に庭園のテーマ、・・・
本当に、仁太郎さんは、素敵な謎を、
たくさんく残してくれました。

なぜ、記録を残さなかったのか、という疑問を
持っていたのですが、ここまで「考え甲斐のある謎」が
あることを思いますと、
敢えて、謎解きの愉しみを残した、と云うべきなのでしょう。